

前回（第86回）学術分科会の御意見と今後の学術振興について①

資料5

科学技術・学術審議会 学術分科会（第87回）

令和5年2月9日

研究時間の確保

- 現状様々な競争的資金があるが、種類によっては調整のために時間が取られてしまい、実際の研究時間が減っているのではないか。
- デジタル化で研究の効率性を高めることが研究時間を生むことに有効だと思う。時間の捻出方法として、デジタルの活用、教育での協働が重要なのではないか。
- サバティカルを取りやすくなる環境を整備することが重要ではないか。
- 講義や広報のような研究時間以外の活動部分の内訳を精査することも重要ではないか。
- 大学や研究所の先生方の研究時間の確保について、FTE換算でどれぐらいの人が各大学・研究所にいるのか、FTE当たりの研究経費がどうなっているのか、FTE当たりの研究補助員、外国人の共同研究者がどれぐらいいるのかということ、一つの指標にしてみたらどうか。

研究人材の育成・確保

- 学部生は研究者のキャリアパスについて知識がなく、研究者自身も「研究者になると企業に就職した場合と比べて年収がどの程度変わるか」等のキャリアに関する情報を、あまりエビデンスベースで持っていない。学部生に対して、研究者のキャリアパスを説明できれば、学生の選択肢が広がるのではないか。
- 海外で学位を取得している外国人をポスドクとして迎え入れると、研究機関及び研究そのものの多様性も増して良いのではないか。
- コロナ禍で意思疎通が苦手な学生が増えていると感じるので、今の学生のコミュニケーション能力の向上を戦略的に考える必要があるのではないか。
- 若手研究者をPIとして独立させても、その後の見通しが立っていない者も多く、組織的な支援・教育が必要。育成には国・産学・人文科学や自然科学など分野を超えた交流と、科研費が取れずとも別の外部資金や運営費交付金などで組織が支援することが必要ではないか。
- 修士の数は博士の数に連動するので、修士の数が少ないという問題も解決するべきではないか。必ずしも博士までは取らないとしても、社会全体での人材確保や、裾野を広げるという点で、修士取得者の増加は非常に重要であると思う。特に日本は人社系の修士取得者数が少ない。人社系の学部の卒業生が学び直して理工系の大学院に入っても、元々大学院での研究経験がないと研究実施に困難な点もあるので、リカレント教育を拡充する上でも、この修士の問題は解決する必要があると思う。

前回（第86回）学術分科会の御意見と今後の学術振興について②

研究活動の基盤的経費の確保

- 国立大学法人運営費交付金は、大学固有のミッション実現に向けた取組（組織改革等）を支えるため、一定係数に基づき予算の一部を、重点的に再配分する仕組みを持つが、この際、大学運営上の非効率な部分を削減することにも限界があり、経常的な事業も削減せざるを得ないところ、ミッション実現に向けた取組を支える別途の財源を確保するべきではないか。
- 基盤的経費と競争的資金のバランスが崩れており、それに伴いデュアルサポートシステムが健全性を失っているのではないか。健全にデュアルサポートシステムが稼働するには、それを測る指標が必要で、どのように健全性を測るかということを考えるべきではないか。

学術全般に関するご意見

- 国際性担保のために、一般的な研究者が国際的なグループ研究が行えるような仕組みを作る必要がある。一旦、研究相手を作ることができれば、その後はネット上で交流できるので、最初の相互交流のきっかけを作る方策を考える必要がある。
- 日本の科学技術の総体が弱体化している問題について、すべての分野が一緒くたに論じられることには違和感がある。また、日本の科学技術・学術研究を推進する主体がまず大学になるということに違和感がある。大学は研究機関でもあるが、教育機関でもあり、研究をしていくという点では非常に能率の悪い組織であると思う。そのため、国全体として科学技術力を高めていこうとしたときに、単に大学にお金をつぎ込むのではなく、「企業、国立の様々な研究所、それから大学」という3つのバランスが取れたような施策を行う必要があるのではないか。
- 「チームサイエンス」と「ビッグサイエンス」というキーワードが重要。理系にとっては当然の概念だが、人文系においてもこれからは重要になるのではないか。社会的課題に応じたイノベーションを起こす上でも必要だが、すぐに役立つのではなくゆっくり役立つような、学術の指向性が強い課題に対応するときにも必要になる。

上記の他に考えられる論点

- 研究時間の確保に関連する、研究における役割分担（研究者・URA等）の更なる進展について。
- 研究時間の確保と学内外の研究コミュニティにおける活動の関係について。
- 日本の学術研究の強みを伸ばすことについて。